

不安がなくなり、トイレにて排泄できるようになった。又、身近にキッチンがある事により出来ることが増えた。

No-25 施設DE 90才 女性

当時の状況 (2000年3月頃)

レベルの違う利用者とのトラブルが頻繁にあった。庭や部屋に放尿、放便する行為、収集癖があった。

取り組みの内容

同レベルの人と同じグループにし、居室を4人部屋から、トイレの設備のある2人部屋に変更、本人の自由な生活を重視しながらハビリやグループワークの参加をすすめた。

経過及び現状

排尿・便はトイレでできるようになり、そのため尿臭がなくなった。収集癖が少なくなった。精神的に落ち着いている。

No-26 施設EG 82才 女性

当時の状況 (H10年11月頃)

放便、放尿があり、又、方便したものをしまおうとして便をさわったり、いろいろなものを口にする。落ち着かない様である。

取り組みの内容

常に職員が近くにいて声かけをする。

経過及び現状

しだいに落ち着き、目立った問題行動もなくなってきた。

No-27 施設FC 女性

当初の状況 (H11年9月頃)

右大腿部頸部骨折、保存的療法で寝たきり度C1、痴呆度、要介護度5
昼夜逆転、移動、暴言、介護拒否、問題行動、食事拒否の状態

取り組みの内容

関係作りと介護拒否、食事拒否については本人の気に入って職員が対応する。問題行動と昼夜逆転については、日中本人の気に入った職員が時間的に多くいる場所に誘導した。

経過及び現状

オムツ使用だったがトイレへ行きたがるようになった。また、部屋で食事をしていたが自ら他利用者がいる食堂で摂食するようになった。これに加えて職員に対する介護拒否が減少し、自主的に好む場所へ移動する様子が見られるようになった。現在では日中読書をし、自力でトイレへ向かい職員との会話を楽しむなど一日を楽しんで過ごしている。

D. 考察

当初、入居者が徘徊していた例をみると、排泄のコントロールを個別的に行うことにより、徘徊が減少するケースが多く見られる。これは、一例ではあるが、入居者が徘徊をすることには、何らかの意味があることを示している。

E. 結論

ユニットケアを実施することで入居者の状況が、ケアや空間等でかわっていくことがわかる。そして、入居者の変化にいくつかのキーワードがみえてきた。①入居者の尊厳が守られる、②入居者の役割ができる、③自宅で行っていた生活の継続である。

これからのユニットケアの議論は、ケアの質の問題とその評価が非常に重要な課題となってくる。こういった意味でも、入居者がユニットケアによってどうか変わったかを知ることとはとても重要と思われる。

既存特養における痴呆ユニットケアへの環境移行が入居者に与える影響に関する研究

分担研究者：足立 啓（和歌山大学教授）

研究協力者：松原茂樹（大阪大学大学院生） 山内美保（和歌山大学大学院生）

大久保幸積（幸豊ハイツ総合施設長） 赤木徹也（工学院大学講師） 舟橋國男（大阪大学教授）

本研究は、既存建物を利用しユニットケアを導入する前後で入居者、職員の行動観察調査を行い、その影響を検証した。その結果、ユニットケア実施後は入居者同士や職員との会話の増加、職員介助や見守り場面の増加など、人と関わる機会が多くなった。また、ユニット内のデイルームで過ごす時間が増え、徘徊傾向の入居者でもユニット内に滞在する機会が多くなるなど、既存建物でのユニットケアの有効性が認められた。また既存の回廊式建物をユニット化する場合に、空間を明確に分節化する必要があることなどの知見や課題も抽出された。

A. 研究目的

特別養護老人ホーム（以下、特養）などの高齢者施設において、「ユニットケア」が注目されている。「ユニットケア」とは、「居室をいくつかのグループに分けて一つの生活単位とし、少人数の家庭的な雰囲気の中でケアを行うもの」であり、入居者1人ひとりの生活を大切にするという考えに基づいている。この考えのもと、近年では新設建物はもとより既存建物を増改築することによって、ユニットケアを実施する施設も出現しつつある。しかし、従来の集団処遇を前提とした既存建物でユニットケアを導入するには、ハード面、ソフト面で様々な制約条件や課題が多いのではないかとと思われる。

そこで本研究は、既存特養の施設建物を継続使用しながら、新たにユニットケアを導入した先駆的な事例研究を行い、ユニットケア実施前・後（以下、実施前・後）の入居者の行動変容からユニットケアによる入居者への影響を把握し、その有効性と共に今後の課題を検討する。

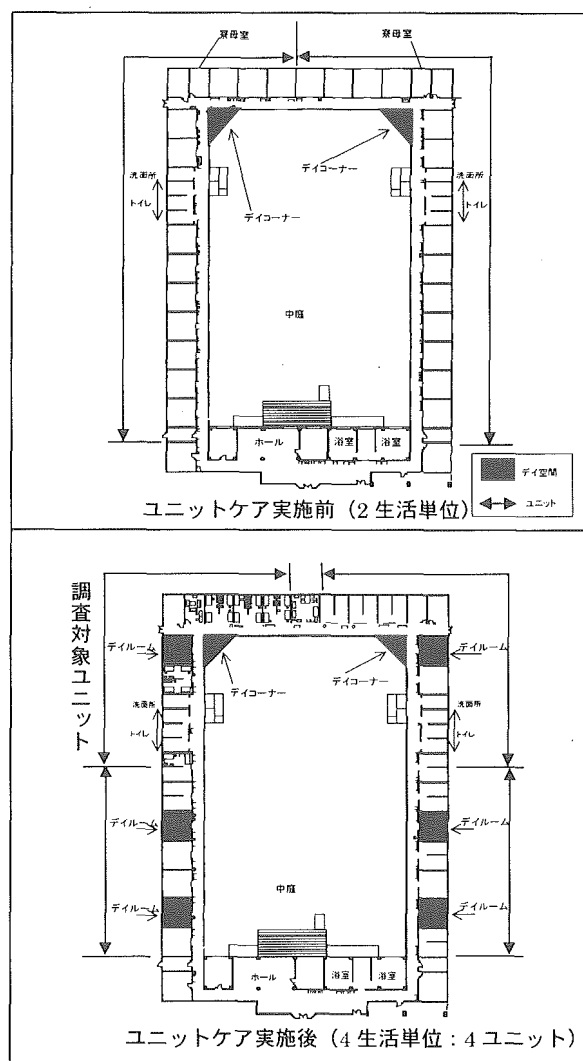


図1 ユニット、デイ空間のユニットケア実施前・後の変化

B. 研究方法

1) 施設概要

調査対象施設は北海道豊浦町に位置する K 特養であり、併設する新築棟では 1998 年から先駆的にユニットケアを実践しているが、この度 2001 年 10 月から既存棟においても中重度の痴呆高齢者、臥床者を対象としてユニットケアを導入した。

図 1 は既存棟での実施前・後におけるユニットとデイ空間の変化を示す平面図である。表 1 は実施前・後のケア環境の比較である。

ユニットケア実施前

- ・ 入居者 100 人を 2 生活単位
- ・ 1 介護単位 50 人が所属
- ・ デイ空間は 1 生活単位に 1 箇所

ユニットケア実施後 (4 ユニット : 生活単位)

- ・ 入居者 72 人を 4 ユニット
- ・ 1 ユニットが 18 人
- ・ デイ空間は 1 ユニット 2 箇所以上
- ・ デイ空間の総面積は 6 倍に増加
- ・ 調査対象ユニットは、実施前に比べ、デイ空間の面積が約 2 倍に増加

写真 1 は実施前のデイコーナーであり、写真 2 は寮母室近くの居室である。この居室では、介護職員 (以下、職員) が、日中に見守りが必要な他室の入居者も誘導し、介護をしていた。写真 3、4 は実施後、調査対象ユニットのデイ空間であるデイコーナーと居室を改造したデイルームである。

実施後のデイ空間は 10 箇所となる。そのうち実施前の寮母室 2 箇所もデイルームとして使用されるが、この部屋のドアがダブルノブとなっており、入居者のみでは自由に出入りできないことから、今回は 8 箇所として分析を行う。

2) 調査概要

表 3 は調査対象者の属性である。調査対象のユニット入居者は、痴呆度が中・重度で、寝た

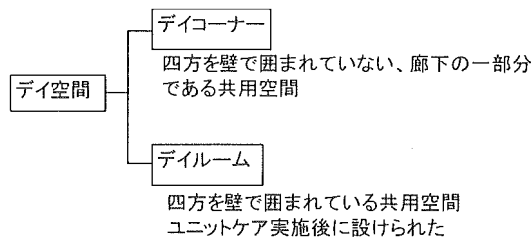


表 1 ユニットケア実施前・後のケア環境の変化

		実施前	実施後		
ソフト面	生活単位(ユニット)数	2	4		
	定員	100人	72人		
	生活単位内人数	2×50人	4×18人		
	1生活単位内職員数	13人	5人		
	介護日課	あり	なし		
ハード面	居室	居室形態	4人部屋	2人部屋	
		居室面積	938㎡(26部屋)	648㎡(36部屋)	
	廊下	廊下の家具	(イス等)あり	(イス等)あり	
		廊下面積	732㎡	732㎡	
	デイ空間	デイ空間	2箇所	10箇所	
		面積	デイ空間全体	43㎡	307㎡
			デイコーナー	43㎡	43㎡
			デイルーム	0㎡	264㎡
	寮母室	寮母室	あり	デイルームと共有	
		寮母室面積	48㎡		
その他面積		484㎡	558㎡		
全体		2245㎡	2245㎡		

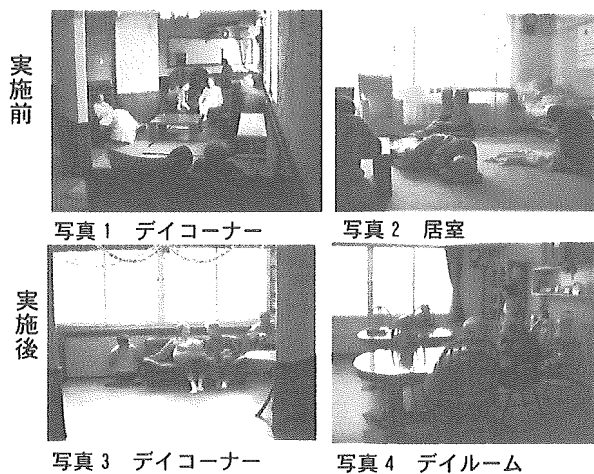


表 2 調査対象者属性

入居者番号	性別	年齢	介護度	自立度	痴呆度	HDS-R/30	ADL/48
NO.1	男	63	4	B2	IV	0	22
NO.2	女	72	4	A2	IV	0	35
NO.3	女	77	3	A1	IV	0	26
NO.4	女	92	4	B2	IV	0	25
NO.5	女	84	4	A1	IV	5	33
NO.6	男	70	3	A2	M	5	28
NO.7	男	86	3	B2	IV	3	33
NO.8	女	77	4	A1	IV	0	28
NO.9	女	83	2	A1	IIIa	8	35
NO.10	女	85	4	B2	IV	0	21
NO.11	女	90	3	B1	IIIa	3	33
NO.12	女	82	4	B2	IIIa	1	26
NO.13	女	92	4	B1	IIIa	1	30
NO.15	女	90	3	B1	IV	11	34
NO.16	女	83	3	B1	IV	4	29
NO.17	男	84	3	B2	IIIa	5	30
NO.18	女	85	3	A2	IIIa	11	40

注) NO.14 は実施後、他ユニットに所属移動の為、調査対象外とした。

きりが少なく比較的歩行自立度が高い 17 名である。実施前・後において行動観察調査を行う。

実施前：2001 年 9 月 30 日、10 月 1 日

実施後：2001 年 12 月 6 日、7 日

調査時間：午前 8 時から午後 7 時（11 時間）

調査方法：5 分毎に調査対象者の行動内容と行動場所を記録用紙に記入する。

C. 研究結果

1) 入居者のクラスター分類（図 2）

図 2 は実施前の行動観察調査の移動状況^{注 1)}、姿勢のデータをもとにクラスター分析を行ったものである。その結果、融合距離 15 で分類した場合、徘徊者と非徘徊者の 2 群に分かれる。なお、徘徊者群に分類された 5 人の入居者は、Algase らの徘徊者基準に該当している。^{注 2)}

2) 実施前・後の姿勢状況（図 3、図 4）

実施後、徘徊者群は移動が減少し、立つ、座る、横たわるなど、滞在する行動が増加する。

実施後、非徘徊者群はイスに座る姿勢が増加する反面、車イスに座る姿勢が減少する。実施前は、職員介助で車イスを使用した後も車イスで 1 日を過ごしたのに対して、実施後は、車イスを使用した後は、家具イスに座り 1 日を過ごすことが多くなったためである。

3) 滞在場所の変容（図 5～図 7）

実施後、徘徊者群は滞在総数が増加し、特にデイ空間の滞在数は倍増する。しかしデイ空間以外の場所の滞在数は大きな変化がない。

実施後、非徘徊者群は滞在総数に大きな変化はないが、デイ空間の滞在数は同様に倍増する。反面、他室、廊下の滞在数は減少する。

これらの変容は実施前、デイ空間が少ないために、居室の 1 つをデイルームとして利用したことによるものである。

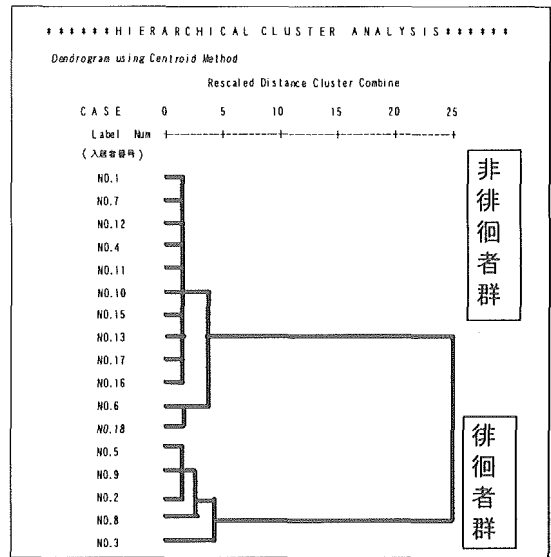


図2 移動状況、姿勢からクラスター分析による入居者分類

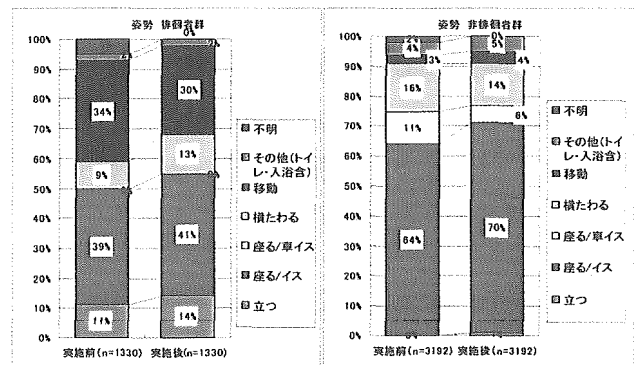


図3 徘徊者群の姿勢

図4 非徘徊者群の姿勢

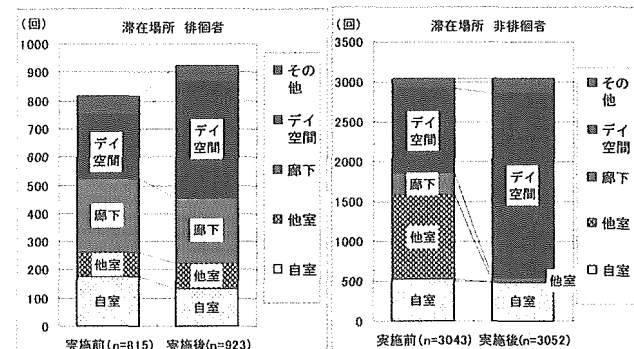


図5 徘徊者群の滞在場所

図6 非徘徊者群の滞在場所

図 7 は徘徊者別にみたユニット内・外の滞在数である。実施後、徘徊者全員の移動や徘徊が減り滞在数が増加する。その内 No.3 を除き、ユニット内に滞在する傾向がみられる。No.5、No.9 は、滞在数は増加するが、ユニット内の滞在数は減少し、他ユニットに滞在する。

実施後、徘徊者も自分の所属ユニットでの滞

在数が増加したが、一部にユニット外で滞在する場合もあり、回廊式廊下を分節化してユニット境界を明確にする必要性が示唆される。

4) 滞在場所での行動の変容 (図 8、図 9)

実施後、徘徊者群は廊下、デイ空間での会話、周りを見回す行動が増加する。デイ空間が増加し、そこにおける会話が増加した。また廊下での会話は実施前・後と変わらず多い。廊下にソファやイスなどが引き続き設置され、単なる通路空間でなく人溜り空間にもなるためである。

実施後、非徘徊者群はデイ空間での会話や介護、周りを見回す行動、が増加する。

入居者の周りを見る行動では、職員や他の入居者の動作を見る、部屋の中や廊下を覗く行動がみられ、ユニットケア生活に慣れる過渡的な行動ではないかと考えられる。

5) 人との関わり (図 10～図 14)

人との関わりとは、入居者が他の入居者や職員と会話や介護などで交流を持つ行動とする。

① 入居者別の人との関わり (図 10)

実施後、人との関わりは 17 人中 15 人と殆ど入居者が増加する。特に No.8、No.9、No.11、No.15 の増加は大きい。

入居者同士の関わりは 17 人中 11 人が増加し、うち徘徊者が 4 人含まれる。これは、デイ空間など交流の場が増加した為と考えられる。

職員・介護の関わりは 17 人中 10 人が増加する。

職員・会話の関わりは 17 人中 11 人が増加する。特に No.10、No.11 は実施前にはみられなかったが、実施後にはみられる。No.5、No.8、No.15、No.17、No.18 は会話の関わりが大きく増加する。

② 場所別にみた人との関わり (図 11、図 12)

図 11 より、実施前は、徘徊者群は廊下での

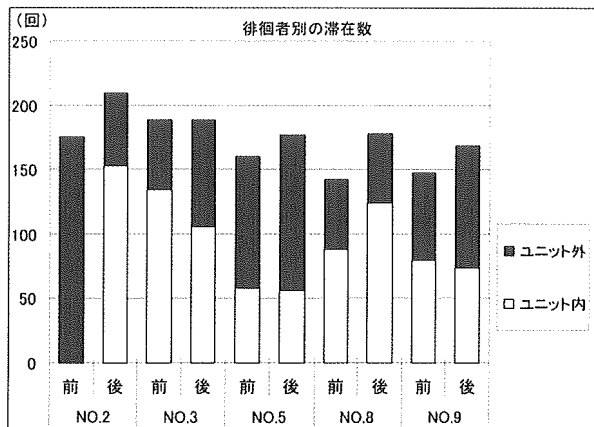


図 7 徘徊者別でみるユニット内・外の滞在数

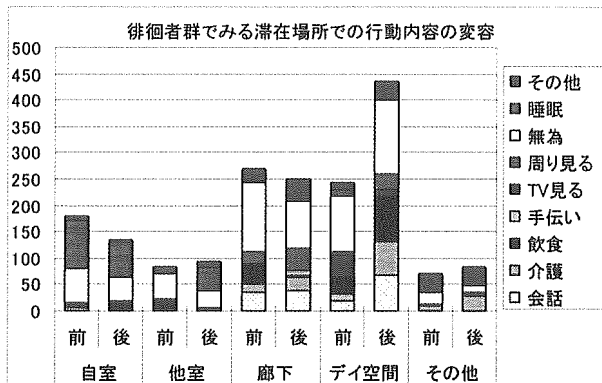


図 8 徘徊者群でみる滞在場所での行動内容

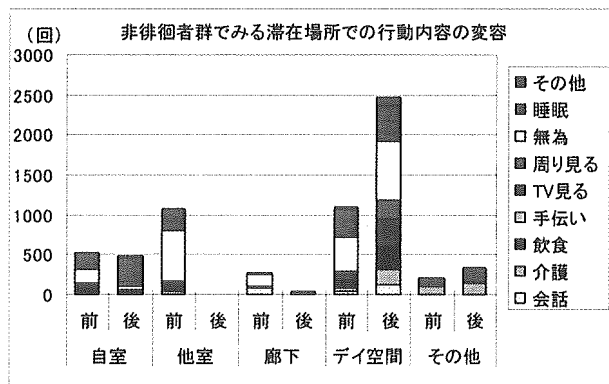


図 9 非徘徊者群でみる滞在場所での行動内容

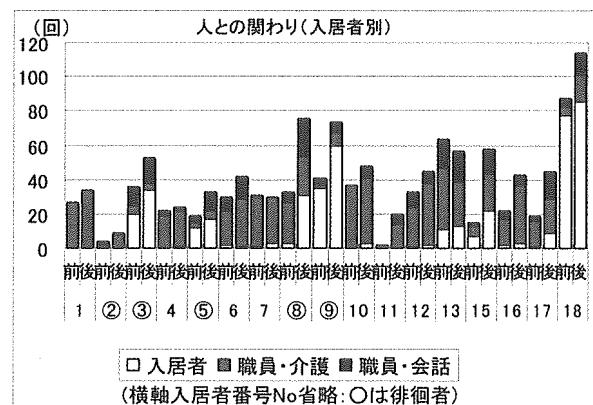


図 10 入居者別にみた人との関わり

関わりが特に多く、自室や他室での関わりは殆どみられない。実施後も廊下での関わりが多いがデイ空間が増大する。

実施後、廊下では、入居者同士の関わり、職員・会話の関わりが増加する。デイ空間では、入居者、職員・介護、職員・会話の関わり、すべてが増加する。

図 12 より、実施前は、非徘徊者群は比較的に廊下、デイ空間、その他での関わりが多いが、実施後は、デイ空間での関わりが大幅に増加し、他室、廊下での関わりが減少する。

実施後、他室での人との関わりは職員・介護の関わりが減少する。廊下での人との関わりは、入居者同士の関わりが減少する。デイ空間、その他での人との関わりは、入居者、職員・介護、職員・会話の関わりすべてが増加する。

実施前は、入居者が他室で一箇所に集まり、職員の介護を受けていたが、実施後は、デイルームを中心として職員・会話の関わりも大幅に増加したことなどから、ユニットケアの有効性が示された。

③ 時系列でみた人との関わり (図 13～図 14)

実施前では、徘徊者群は入居者同士の関わりは、昼過ぎに若干みられる。職員・介護の関わりは、介護日課でのトイレ誘導の時間に多い。職員・会話の関わりは、夕方や昼間を除いて殆どみられない。

実施後では、入居者同士の関わりは、食事時間以外で頻繁にみられる。職員・介護の関わりは少ない傾向にある一方、職員・会話の関わりは頻繁にみられ、特に昼過ぎに多い。

実施前では、非徘徊者群は入居者同士の関わりが一日を通してみられる。職員・介護の関わりは頻繁にみられるが、特に日課のトイレ誘導時間に多い。職員・会話の関わりは、2-3 時間おきに 1、2 回みられるが、それ以外では殆ど

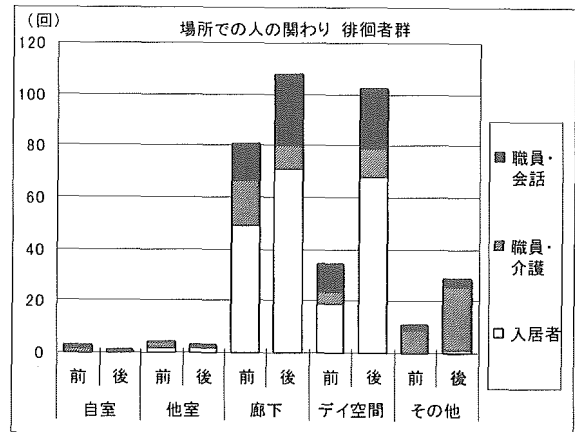


図 11 徘徊者群でみる場所での人との関わり

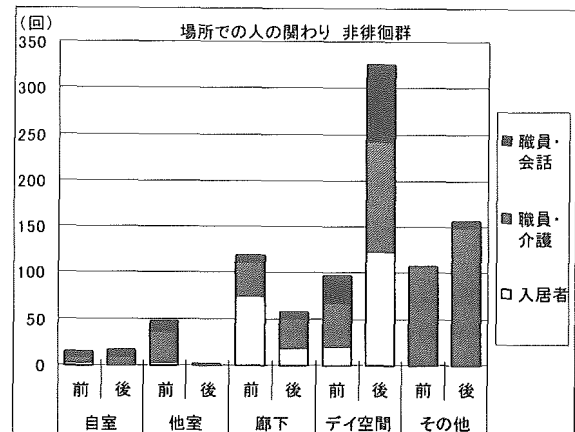


図 12 非徘徊者群でみる場所での人との関わり

みられない。

実施後では、入居者同士の関わりは回数、頻度共に多い。職員・介護の関わりは、実施前と同様にトイレ誘導時間に増加する。また 14 時から 16 時は入浴の為、介護の関わりが多い。職員・会話の関わりは増加するが、特に介護の関わり後に多い傾向がある。これは実施前の職員は直接介護に追われていたが、実施後、職員は直接介護が終わっても積極的に入居者を見守り、状態把握する行動が増えたためであり、ユニットケアの効果が認められる。実施後でも入浴介護はユニット職員が行うとは限らないので、介護と会話の両方の関わりが生じている。

D. 考察

1) 入居者の行動と場所

実施後、他室利用が大幅に減少し、デイ空間

利用が顕著となり、特に会話の増加が大きい。これはデイ空間の面積が増加したことに起因するが、ユニットケアを実施することで、デイ空間の利用目的をより明確化したこと、職員のユニットケアへの取り組む意識の反映がその要因と考えられる。実施前に、デイルームとして使用していた1居室では、会話は殆ど無く、ただ集められていて、職員との関わりは直接介護の時に多かった。しかし、実施後にデイルームに変容した元居室では、他の入居者や職員との交流も頻繁に行われており、ユニットケア実施による会話の増加傾向が示された。

2) 人との関わり

実施後、人（入居者・職員）との関わりも増

加し、特に職員・会話の関わりが大きく増加した。ユニットケア実施前・後の職員人数に変化はないが、職員が寮母室ではなく入居者の近くに居ることが多いため、見守りと対応がしやすいケア環境が形成されたと考えられる。実施前と同じ時間帯でトイレ誘導・介助は引き続き行うが、それ以外の時間帯は介護日課に制限されることが無くなったこと、さらには直接介護の仕事が一段落した際に、職員はデイ空間で入居者と共に過ごし、見守ることができるようになったことが、関わりを促進したと考えられる。

3) 徘徊者について

実施後、入居者が落ち着く傾向がみられ、徘徊者もユニット内の滞在数が増加した。しかし、

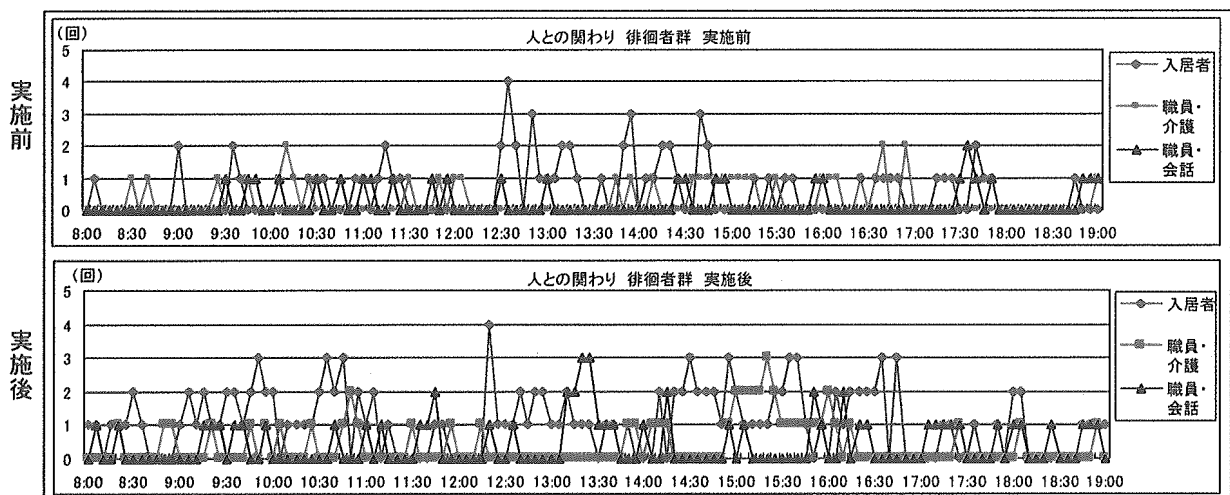


図 13 時系列でみたユニットケア実施前・後の人との関わり（徘徊者群）

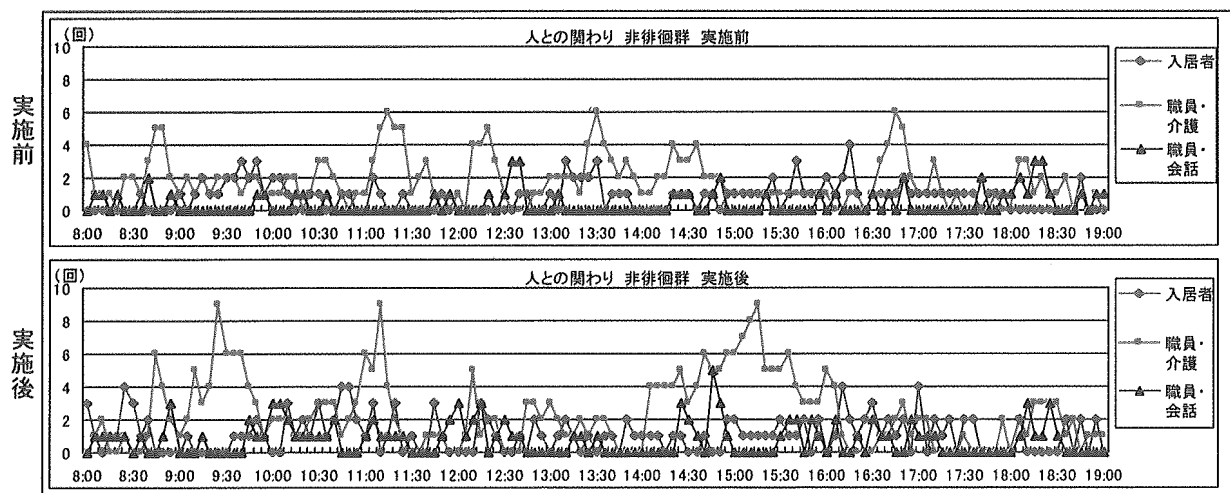


図 14 時系列でみたユニットケア実施前・後の人との関わり（非徘徊者群）

他ユニットに徘徊する場合もあり、担当ユニットの職員が自分のユニットに戻るように、回廊型建物内を探し回り、誘導を行う場面も見られた。ユニット内で職員が入居者を見守る機会は増加したが、回廊型でユニットケア空間としての独立性を確保することが重要であると考えられる。

E. 今後の課題

既存建物を利用しユニットケアを実施した先進事例をもとに、ユニットケアの有効性を検討し、知見や課題を抽出した。

本研究の調査時期は、ユニットケア実施1ヵ月後であり、ユニットケアの徹底や職員の慣れが十分に浸透していない時期であったこと、意識して人員配置の増員を行わないでユニットケアを遂行したが、2002年4月からはユニットケア職員も増員されることから、さらに半年後、一年後の事後評価を行い、その有効性を検証する必要がある。

謝辞

本研究の遂行にあたり、K特養の入居者、職員の方々をはじめ、奥俊信北海道大学教授、同研究室、隼田尚彦北海道情報大学助教授の諸氏に御協力を得たことに謝意を表する。

注1) 移動状況とは、調査シートにプロットされた入居者の場面を5分前と比較し、移動したかどうかを示す。

注2) 徘徊者基準の内、頻繁に歩行または動き回る、過活動または特定の作業を繰り返す、繰り返し離棟する、などに該当している。

参考文献

- 1) 平成12年度版厚生白書、厚生省、p110、2000.7
- 2) 中島紀恵子他、グループホームケア、日本看護協会出版会 P136-137、2001.10
- 3) 足立啓他、「痴呆性高齢者のグループリビングへの環境移行

における行動変容に関する研究 その1～3」日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1、p419-424、1999.9

- 4) 井上博文他、「特養・老健におけるユニットケアのユニットケアの現状とその問題」日本建築学会学術講演梗概集 E-1、p227-228、2001.9
- 5) 三宮基裕他、「既存特別養護老人ホームにおける痴呆性老人増の受け止め方と今後の方向」日本建築学会学術講演梗概集 E-1、p229-230、2001.9
- 6) 小泉美佐子他、「施設に入居した痴呆老人の徘徊行動の分析」看護研究、Vol.3：p43-51、1996.6

生活環境の変化が痴呆性高齢者の痴呆症状に及ぼす影響についての実証研究
～ 施設高齢者の居場所に関する研究 ～ - 施設から民家に通って -

分担研究者：大橋美幸（高齢者痴呆介護研究・研修仙台センター）

研究協力者：高橋誠一（東北福祉大学）、中里仁、高橋めぐみ、大平依子、松本久、
佐藤みか、山崎恵（せんだんの杜）

特別養護老人ホームから、週5日、日中、近隣の民家に通ってすごしている。スタッフと研究者で研究会をひらき、①資料作成、②これまでを振り返って自由討議、③施設及び民家をビデオ撮影してスタッフの関わりなどの検討を行った。

居場所について取り上げたのは、高齢者・スタッフ・家族の関わりと、一人ひとりの「すること」、互いの関係をつなぐ「すること」（「すること」はまわりの家具や小物、施設及び民家そのものとの関わり）であった。最初は施設と民家を比較して、関わりが異なる理由を「すること」やハード面の違いにおいていた。しかし、そう考えるスタッフの意識自体が疑問視され、さらに、資料作成を通じて民家も最良ではないことに気づく中で、施設と民家の両方で関わりや「すること」が見直されていった。

A. 研究目的

特別養護老人ホームのユニットである「ひまわりグループ」は平成13年7月から、週5日、日中、近隣の民家に通ってすごすようになった。「施設に移り住んでも、できるだけ、これまでに近い生活を…」という思いで始めたものであり、最初、慣れなかった高齢者も、施設とはやや異なる関わりの中で、それぞれに落ち着き場所を見つけている。

スタッフの振り返りから、施設から民家に通う中で見えてきたところをまとめた。

B. 研究方法

平成14年1～2月、「ひまわりグループ」及び特別養護老人ホームのスタッフ7人と研究者2人で、研究会を3回ひらき、①これまでの経緯などをまとめた資料作成、②これまでを振り返って自由討議、③施設及

び民家のすごし方をビデオ撮影して、スタッフの関わりの検討を行った。1回の研究会は3時間程度であった。

①資料作成は、民家に通うようになった経過、施設及び民家での一日の流れ、高齢者一人ひとりの変化、施設及び民家で高齢者がすごしている場所の変化であった。

②自由討議は、施設と民家を比較するかたちで、高齢者とスタッフの関係、高齢者同士や家族との関係などを話し合った。

③ビデオ撮影はスタッフが行った。民家に行く前、朝食後、施設ですごしているところ（15分程度）、昼食前後、民家ですごしているところ（60分程度）、民家から帰ってきた後、夕食前に施設ですごしているところ（30分程度）であった。検討は、スタッフの関わりについて、気づいた点があれば、ビデオ再生をストップして、意見を出し合うかたちで行った。これに先立ち、

研究会で「良い介護」「悪い介護」をテーマにブレインストーミングを行い、参加者の中で価値基準の共有を行った。なお、ビデオ撮影などについて、高齢者本人及び家族に説明し、同意を得た。

研究会の作業結果は、スタッフの振り返りの中で焦点になっていた「居場所」「家族との関係」「スタッフの関わり」というキーワードからまとめた。そして、まとめに対してコメントを書き合うかたちで、意見を集約した。

C. 研究結果

(1) スタッフの振り返り

1 回目の研究会は、これまでを振り返った自由討議であり、民家に通いはじめた当初、その後の経過、現状について、印象・感想を言い、施設と民家を比較して、高齢者・スタッフ・家族の関わりなどを話し合った(資料5)。

施設と民家を比較して、民家での関わりの方が良さが強調される一方で、「スタッフが『民家に行ったからできる(施設ではムリ)』と逃げてしまっているのではないか」、「(施設で居場所を見つけきれない人を民家に誘っているが)民家に行ったから見えてくるというのは危険。なぜ施設では見えてこないのか」という意見が出された。

2 回目の研究会は、作成した資料を見ながら話し合った。施設から民家に通うようになった経過、高齢者一人ひとりの変化をまとめた資料(資料1、資料3)では、「こういう経緯があって始まったのに、それが今、活かされているかどうか。最初は個人個人を支えるための小さなグループだったのに、『ひまわりグループ』として別のものを作ろうとしていたのではないか」という意見が出された。

施設及び民家での一日の過ごし方をまとめた資料では、「民家に行く日は結構、バ

タバタしている」という意見がある一方で、「民家に行かない日(施設)の方がタバタしている」という意見が出された(資料2)。

施設及び民家で高齢者がすごしている場所の変化をまとめた資料では、高齢者がすごしている場所が変化した理由、高齢者同士の関わりの変化、その場面であった最近の出来事などが話し合われた(資料4)。

その後、家族との関係について自由討論を行った(資料5)。

3 回目の研究会は、施設及び民家のビデオを見ながら、スタッフの関わりについて意見を出し合った(資料7)。一部で「良い介護」「悪い介護」のブレインストーミング(資料6)を参考にした。

施設のビデオを見て、「スタッフがいない時に、みんながあまりにも静かでショックだった」「スタッフが入ってくると、急に声が大きくなるのはスタッフを待っていたのかも。これまでは聞き流していたように思う」などの意見が出された。また、民家のビデオを見て、「職員の動きが多すぎる。座っていることがないよね(高齢者のそばに座っていることはできないのか)」「(食事の支度をしている場面で)『お願い』と言いながら、無理矢理させているのかも」などの意見が出された。

(2) 施設及び民家での居場所

「居場所が見つかった」と表現されたのは、民家に通い始めた当初、一番落ち着かなかったAさんが、Gさんに声をかけられて隣りに座るようになり、徐々に、そこで過ごすようになったことであった(資料3、4)。また、Bさんが、Gさんに受け入れられず、過ごす場所を変わっていったことに関しても、「仲の悪い中でバランスを保って、居場所ができていく」と表現されている(資料4、5)。このように、居場所について、高齢者同士の関わりが取り上げら

れた。

同時に、「(すごす場所が変わって) Fさんが障子を閉めてくれた」「(窓側にいたときに) Bさんが外を見ていた」というように、一人ひとりの高齢者と、家具や小物、施設及び民家そのものとの関わりも話に出た(資料4)。このような関わりは、「施設では意図的に作らないと『すること』がない」というように使われる、『すること』と同じものである。また、「(隣りどおしになって) GさんがFさんにお茶を入れてくれる」というように、高齢者同士の関わりをつなぐ『すること』の話も出た(資料4)。

そして、この『すること』について、「Gさんが、施設ではすることがないと寝てしまう(資料3)」、「スタッフが『今日は出かけないからゆっくりしてて』と言い、休日モードに入っている(資料5)」など、スタッフの関わりを振り返る意見が出された。

また、ビデオを見ながら、「(盛り付ける場面で)皿の置き方に悩む。どうしたら手が届くか」「炊飯器を茶の間に持ってきて、ご飯を盛り付けるのが、本当にいいのか」など、民家での『すること』を一つひとつ見直していく意見が出された(資料7)。

(3) 家族との関係

「民家では家族が台所に立つ」「家族が、本人に目を向けるだけでなく、まわりの高齢者にも目を向けてくれている」などの意見が出された。その理由として、「(民家は家なので)家族がそうしやすいのでは」「本人の変化が家族(の姿勢)を変えたのでは」という意見がある一方で、「スタッフが家族から話を聞こうとするようになった」とスタッフの変化を指摘する意見もあった(資料5)。

「(家族は)施設では『私がしてはいけない』と思うのだろうか」という意見があり、

逆に、「家族が入ることで、スタッフと高齢者を含めて、その場の関係性が変わっていく」と、家族が入ることでコミュニティがつくられていくという意見が出された(資料5)。

(4) 施設及び民家でのスタッフの関わり

「施設では仕事が目について、しなければならぬと思ってしまう」「民家に比べて、施設では関わりが少ない」という意見があり、施設での動線の長さ、ユニットごとの区分けなどが検討されたが、他の話題について意見交換が進む中で、そもそものスタッフの意識を問うところに至った(資料5)。

その後、スタッフの関わりが見直され、「食事の支度に他の人を誘ってみても…(資料7)」「外出でDさん、Gさんを誘うことが多いのは何となく…(資料4)」「意図的に仲が悪い2人と外出したこともあった(資料4)」などの意見が出され、なにげなく続けられていることが、あらためて検討された。ビデオを見ながら、「職員がいそがしく動き回っている」「(スタッフと高齢者の)ペースが合っていない」という意見が出され、スタッフが動き回っている間に、高齢者がしていることを見落として、動きを止めてしまっている場面、スタッフが準備をしすぎてしまって、違和感がある設定になってしまっている場面などが話し合われた(資料7)。

また、施設でのスタッフがいけない場面の静けさを知り、民家での茶の間の場面についても「退屈しているのでは」という意見が出て、スタッフがこれまで「高齢者は居心地良くすごしている」と考えていた前提が一部で崩れてしまう。「ショックだった」という意見がある一方で、「これまで聞き流していたように思う」と何かを感じていながら声を上げなかった自分を振り返り、

「家だったら…」と新たなかたちを模索しようとする意見が出された(資料7)。

D. 考察

研究会は、スタッフ一人ひとりの気づきを共有し、疑問を返していく過程であった。例えば、2回目の研究会で「民家に行く日は結構バタバタしている」「民家に行かない日の方がバタバタしている」という異なる意見が出されている。前者は民家に出かけることが大変で、行かない日は休みモードに入ってしまう、後者は民家ではグループだけのことを考えて行動できるのに、施設では施設全体の動きを気にして業務に忙しくしてしまうスタッフの意識の違いを示している。このようなそれぞれ視点の異なる意見を積み上げて、スタッフの関わりや居場所の検討がなされていった。

当初は、施設と民家を比べて、民家での関わりの方が良さが強調されていた。しかし、「それは民家だからできることなのだろうか」「施設ではできないのか」という問いかけが、1回目の研究会でなされている。

そして、この疑問が、2回目の研究会で、資料をまとめて振り返る中で、「民家での過ごし方も、これが最良なのではない」に変わり、3回目の研究会で、ビデオを見ながら、施設及び民家での関わりがともに見直されていくことにつながったと考える。

「居場所」について見ると、当初は、施設と民家を比較して、関わりが異なる理由を、「すること」の違い、まわりの家具や小物、施設及び民家そのものの違いに置いていた。しかし、それが「民家だからできることなのだろうか」「施設ではできないのか」という問いかけから、「なぜ施設と民家では『すること』が違うのか」「理由はハード面だけではないはず」という疑問につながったと考える。

3回目の研究会では、「居場所を見つけ

た」とスタッフが考えていたところで、高齢者が本当に居場所を見つけていたのだろうかという根本的な見直しがなされた。スタッフの関わりの中で、高齢者一人ひとりの「すること」、互いの関係をつなぐ「すること」が話し合われ、施設及び民家であたりまえに継続されてきたものがゆらぎ始めた(「民家もこれが最良なのではない」という気づきは、これらの前提になっていると考える)。

そして、「家だったら…」と家にモデルを求めて、居場所やスタッフの関わりを考えていこうとする意見に見られるように、検討は「施設に移り住んでも、できるだけ、これまでに近い生活を…」という「ひまわりグループ」を始め、民家に通うようになっていった思いにもう一度返っていったと考える。

施設から民家に通うことで、「家」に居る、「家」で生活している高齢者一人ひとりの姿がイメージしやすく、気づくことが多かったのは事実である。しかし、「家だったら…」、もっと言えば「自分や自分の家族だったら…」と考えれば、施設にいたとしても気づきは自然と生まれてくるし、民家での過ごし方がベストでないことも分かってくる。そして、このような共に暮らす視点を持ちながら、現在、民家という場を手がかりに始めている、高齢者一人ひとりの施設に移り住む前の暮らしを知ろうとし、高齢者一人ひとりのリアリティに近づいていこうとする実践を、施設を含めて進めていけば、居場所は見つかっていくのではないだろうか。高齢者一人ひとりの「すること」、互いの関係をつなぐ「すること」、つまり生活を継続的に展開させ日々を意味づけていくものを、まわりの家具や小物、施設および民家そのものに配慮しながら、高齢者・スタッフ・家族等の関わりの中で、一緒に考え続けていきたい。

資料1：

研究会で作成した資料① 施設から民家に通うようになった経過

平成9年 食堂ミニデイ

特別養護老人ホームでは、他のグループで、施設から民家に通う取り組みがスタートしていた。その実践を受け、「民家に出かけなくても、施設で同じような関わりはできないか」と考えていた。

一人の痴呆症のAさんが、物盗られ妄想、収集癖などにより、他の入居者から孤立していることをきっかけに生活の見直しを始めた。食堂の中に6畳の畳を敷き、もらいものの家具で目隠しをつくり、外の動きが気にならない場所を作った。

最初は、Aさんと職員1人で行っていたが、食事以外は居室に閉じこもっていたBさん、意味のないナースコールを頻繁にならしていたCさん、Dさん、生活全般に介助が必要で、食事以外は食堂のマッサージチェアですごしていたEさんの4人が加わり、5人の入居者と職員1人で関わりをはじめ（9:00～18:00）。

平成10年8月 2-1ミニデイ

施設から民家に通う取り組み(1グループ)、食堂ミニデイ(1グループ)を行っていくうちに、参加されている入居者の生活に変化が見えてきた。その一方で、残りの39人の入居者は、これまでと変わらない生活をおくっており、そのうち、5～10人の入居者が、ケアワーカー室のカウンターにイスを持ってきてすごしていた。

ケアワーカー室は、ケアワーカーが常に立ち寄り、その都度、入居者がケアワーカーに話しかけ、関わりを持つだけの関係であったが、「もしかしたら、この方々も、関わりがほしくて集まっているのでは…」と考えるようになり、少人数での関わりをおこなっていくことになる。

メンバーは、通りかかる全ての人に声をかけていたFさん、いつもFさんの隣にいて、お世話をしていたGさん、男性入居者を夫と思い行動を共にしていたHさん、ナースコールが頻繁で依存心の強いIさんの4人で、Fさんの居室(和室)に、女性のGさん、Hさんが引越して、居室を居間の空間と、寝室の2つに分けた。4人の入居者と職員1人での関わりをはじめ（11:00～20:00）。

平成12年3月 ひまわりグループ

2つのミニデイを通して、入居者と関わりを持つにつれて、個々の生活を見つめ直すことができるようになる。

あるきっかけから、食堂ミニデイの5人が2-1ミニデイに遊びに行き、合同ですごすことがあった。はじめは、食堂ミニデイのメンバーが拒絶するのではないかと考えていたが、完全に仕切られた空間が良かったのか、自分たちで、お互いの関係をつくり、予想に反してよい雰囲気になっていた。何度か試していくうちに、お互いのミニデイの職員も協力しあい、就寝介助まで同じ職員で対応できるようになった。「どうせ関わるなら、施設から民家に通う取り組みのように、起床介助から就寝介助まで同じ職員で関わりたい」という思いが強くなり、日勤で出勤していた食堂ミニデイを、8:00からの早朝に変更し、担当職員を固定して、1日の生活を支えていくこととする。

【生活空間づくり】

2-1ミニデイの雰囲気を保ちつつ、食堂ミニデイで使用していたなじみのあるソファやこたつを、2-1ミニデイの場所に持ち込む。人数が8人（食堂ミニデイ5人、2-1ミニデイ3人）に増えたことで、個々の居場所、空間づくりからはじめる。普段のすごし方を一人ひとり確認し、TVを見て過ごしているのであればTVの見える位置へテーブルを移動してみたり、時計の見える位置、ソファの向きなどを考え、生活空間を入居者と一緒につくっていった。

【昼食のご飯と味噌汁の炊事】

空間づくり、個々の居場所が定着したころ、お茶のみだけではなく、おしぼりたたみ等の軽作業を促すと、お願いした作業を手早くこなし、時間をもてあましていくかのように傾眠する姿も見られるようになってきた。

メンバーが全員女性で痴呆症の方が多いこともあり、昔、主婦だったころの記憶に近づける事によって、なにかケアのヒントを探るために、昼食のご飯と味噌汁の自炊を開始してみる。車椅子使用者が多いが、テーブルの上に材料やおかずを準備すれば、自ら進んで切ってくれたり、おかずを一人分ずつ小鉢によそってくれる。自炊の中から入居者自身が自分のことを話してくれるようになり、会話が広がるとともに、以前の生活背景、地域背景などが把握できた。

【民家に通うようになるまで】

様々な生活の変化が見えてきた一方、ミニデイの場所で、寝食住が完結してしまっていることに気づく。まずは、寝食を分けることから始めようと、2階ケアワーカー室を活用していこうと考える。ミニデイの場所は居室として使用し、2階ケアワーカー室に通うことを考えたが、いざ実行しようとした時に、特別養護老人ホームで地域に民家を借り上げる話が持ち上がり、ひまわりグループが通ってみるようになった。

以前の生活により近い民家に通って生活することで、その人らしい生活支援ができることを期待した。

資料を作ってみて

振り返ってみて、これを新しく加わったスタッフに伝えきれていたかどうか考えた。

また、こういう経緯があって始まったのに、それが、今、活かされているかどうか

最初は、個人単位の小さなグループだったのに、「ひまわりグループ」として別のものを作ろうとしていたのではないか（一人ひとりの生活を見直すためのグループが、グループ全体の見直しになっているのも事実。両方とも大事なことはあるが、資料作成を通じて、一人ひとりの生活を大事にしていきたいという思いが強くなった）。

資料 2 :

研究会で作成した資料② 施設及び民家での一日の過ごし方

民家での一日

(スタッフの動き)

- 11:00 外出準備 ※メモに書いてある補充物のチェック、日誌確認など
トイレ誘導
上着を1枚プラスして、準備できた方から食堂へ
- 11:30 遅出出勤。申し送り。
昼食をもらう ※かごの中におやつがあるか、みそ汁の具を確認
全員準備ができたなら1階へ。職員Fさんと調整
車を準備(Fさんが余裕があれば出して置いてくれる)。車に乗り込む
- 12:00 出発→民家に到着。
※デイサービス車から先に降り、移動後、もう1台を玄関につけて車を降りる
昼食準備。
※米はひまわりについて、すぐといておく
副食は口の皿にまとめてのせる(Gさんに頼んで台所で、寒い時は茶の間でも)
みそ汁の具を切ってもらう
※ご飯ができるまで、時間がかかるので、時間を見計らって準備に取りかかる
待っている間は、お茶飲みやおかし(食器棚の下の扉に入っている)でのんびり
時間は気にせず、その場のなりゆきで
- 14:00 昼食
※のんびりと。昼食後にお茶飲みなど
食器の片づけは後回し。あとは臨機応変に
- 16:00 片づけ、掃除
少しずつ帰る準備を
※バタバタするとお年寄りもそわそわしてしまうので、さりげなく
- 16:30 職員Fさんが迎えに来る。帰る準備
※1台が先に乗り込み、終わったら移動して、デイサービス車に乗り込む
戸締まり確認
※全員が車に乗り込んだら、和室を掃除機で掃除する。
ガスの元栓、ポータブルトイレの洗浄、トイレの水(流れっぱなしになってないか)をチェックして、消灯、戸締まり。職員Sさんがいなければ、水道の栓も閉める。
- 17:00 施設へ。靴を履き替えて2階へ。
車をしまう(職員Fさんがしてくれることもある)
記録後、早出退勤。
※民家での様子を必ず記録する
トイレ誘導、Fさん・Hさん、ベッドに横になってもらう
- 18:00 夕食。
就寝。本人から「寝たい」という希望のある方から
※Fさん 口のまわり、手の指がきれいになっているか
Gさん 入れ歯を外す時に工夫して(横になってからの方が外してもらえる)

施設での一日
(スタッフの動き)

11:00 Fさん、Hさんのパット交換

米とき

※米は流しの隣の白い棚の一番下。米を4合、もっと食べたい人は多めに入れる。

Aさん、Bさん、Dさん、Gさんに声をかけて、といてもらう

11:30 遅出出勤。申し送り

昼食をもらう。

※食器も一緒にもらってくる

みそ汁づくり。もりつけ

※Gさんに材料を切ってもらう

もりつけはGさん、Bさんを中心に。果物はFさんも(食べられないように注意)

昼食

※Fさん 三角おにぎり

Hさん たわらおにぎり

⋮

資料を作ってみて

民家に行く日は、結構、バタバタをしていることに気がついた
民家に行かない日の方がバタバタしている。

↓

施設での動きはもっとある

廊下・居室の掃除、洗濯物の片づけ、入浴、買い物、シーツ交換

全体に関わるものでは、ナースコールの対応、洗濯物たたみなど

民家に行っているため、施設にいる時にまとめて片づけている気がする

↓

職員によって意識が違う

資料3：

研究会で作成した資料③ 高齢者一人ひとりの変化

Aさん

民家に通うようになり、一番不安定で落ち着かなかった。一つの場所にとどまることが少なく、和室、台所、廊下へ、時には外まで出て行かれることがあった。何か聞くと、必ず「怒られっから」と話される。

ある時、Gさんから「おばあちゃん、ここに座んなさい」と呼ばれ、隣に座って、次第に傾眠を始めた。次の日も、Gさんに呼ばれて隣に座り…、そこが、落ち着く場所になっていた。笑顔も多く見られ、徐々にGさんと話をするようになる。これは、民家にいる時だけの関係ではなく、施設でもGさんから声をかけることが多く、安心してGさんの話を聞いている。

また、来客に対して、家のものとしてきちんと挨拶され、「中に入らい」と誘うこともあった。

Fさん

施設でも民家でも、正直あまり変化が見られない。しかし、民家に行くと、「いま何時」などの問いかけが、施設に比べて少ないように感じる。

長男の嫁が民家に来た時に「施設に面会に行っても、お姉さんと呼ばれて、職員の一人としか思っていないけど、こちらに来ると、嫁と分かってくれるんです。昔の母の家に遊びに来ている感覚で、こちらに来れるんです」と話されていた。Fさんについて「こちらの方がおっとり、ゆったりしている。昔に戻りたい」とも。

毎週、長男が施設に来られることはあっても、これまで、嫁はほとんど来ることがなかった。民家に通うようになってから、仕事の合間などに訪問してくれるようになった。

Gさん

施設でも中心的存在であり、自炊などを進んで手伝ってくださる。腰痛があり、手引き歩行、または車椅子を使われていたが、民家に出かけるようになり、車椅子を用意しても、「歩くがね」と1階まで歩かれるようになった。今では、他の入居者の車椅子を足早に押ししたり、民家の入口の階段を介助なしで昇降したりするようになっている。

民家につくと「何かすることない？」と台所に顔を出し、手伝ってくださる。

施設でも、「何かすることない？」と聞くことがあるが、何もないと、ベッドに戻って、ベッドの上ですごしている。

Jさん

施設では、食事以外、施設のソファに横になって過ごされる。まわりで、何をしようがあまり関心がない。

民家に通うようになって、庭を気にするようになり、「あの草を取りたいな」「あの木の枝を切って」などと言われるようになる。家族に話を聞くと、以前、庭いじりを毎日されていたそうである。

民家では横になることがなく、いろいろなことに興味を持ち始めている。

資料を作ってみて

冬は寒くて動きがあまりなくなってしまう。

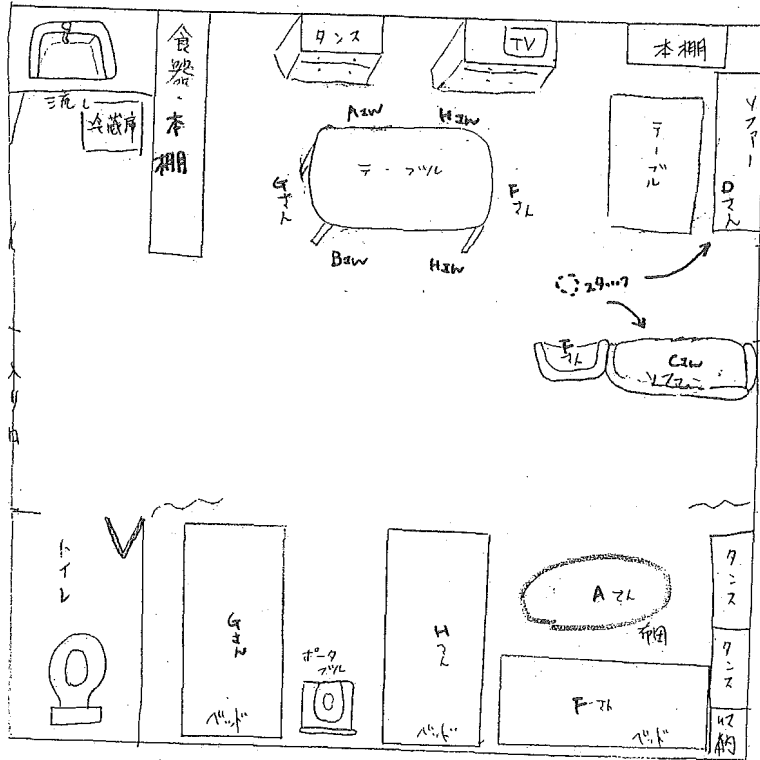
資料4と合わせて考えることができるのでは？

資料4 :

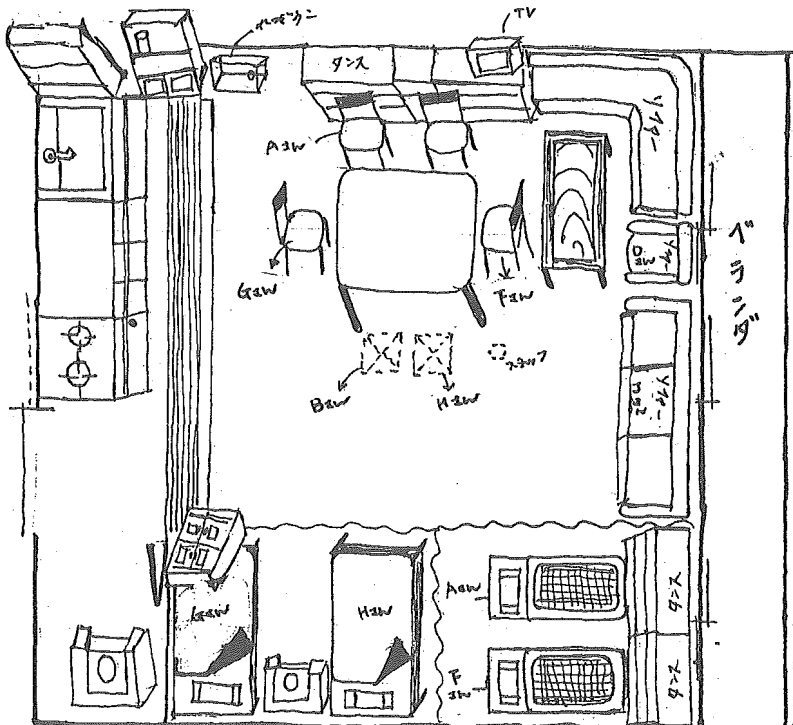
研究会で作成した資料④ 施設及び民家で高齢者が過ごしている場所の変化

施設

5月まで



現在



施設の変化を見て、意見交換

●「家具の配置が変わっていておどろいた」

6月に来たスタッフが、以前の状況を知らなかった。

以前は、洗面台で調理などをしており使いにくかった。流しと電磁調理器を入れた。

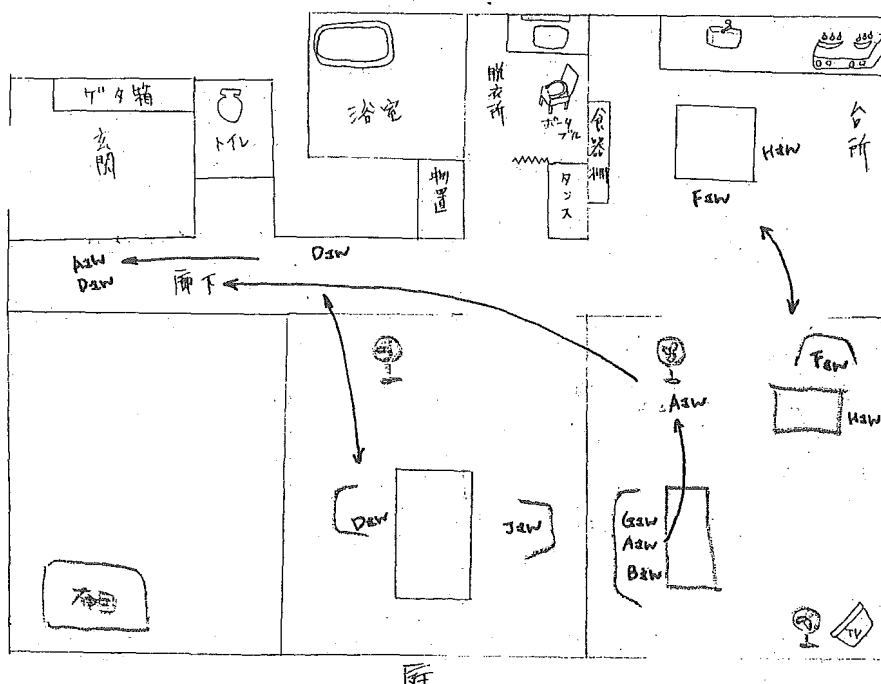
民家

1ヶ月目(7月～)

部屋を有効に使ってみる。互いに距離を置いてみる。最初は、台所・茶の間の両方を使っていた。

Hさん：茶の間の時は座椅子使用。

Aさん・Dさん：落ち着かず、1階のいろんな場所へ



2～3ヶ月目(8月～)

2人座れるソファが入り、Fさん・Hさんも茶の間で。

Dさん：スタッフが台所で洗い物をしている時に、そばに座っている。

Aさん：午後になると、脱衣所で服を脱ぐ。